

# 異人殺し伝承の創造

——若者たちの語る怪談と「こんな晩」——

常光徹

## 一、はじめに

激しく移り変わる現代社会のなかで、かつての共同体の語りの場を母体として、育まれ成長してきた口承文芸は、今日、抜き差しならぬ転換期にさしかかっていると言つてよいだろう。伝統的な民俗社会が変質・消滅をよぎなくされる状況に直面して、今まさに、それらを語ることの意味が問いかれていている。「語ることとは何か」といった、これまで自明のことのように受けとめてきたテーマを、意識的に討議や実践活動の場に引き出してきたのも、現代社会との関わりを模索する作業の一駒と見てよい。

しかし、他方では昨今のこうした動向とはまったく別の次元で、若者たちを中心新たに「はなし」が次々に創造され、現代社会に伝承のネットワークを張りめぐらしているのも事実である。

本稿では、中高校生が好んで話題にする「はなし」のなかから、現代の異人殺しをテーマとしたタクシーの怪談「奪った指輪」に注目し、

その歴史的な広がりと、話の底流に貫かれている因果応報思想の諸相について考えてみたい。

## 二、二つの「こんな晩」

次に紹介する話は、一九八六年の夏に都内の女子中学生から私が直接聞いたものである。<sup>(2)</sup>

### 〔資料一〕 奪った指輪

あるタクシーの運転手の話なんだけど。夜中の十二時を過ぎたから、もう仕事やめようかと思って、車庫に帰る途中に若い女人が立つて。そこで、手を上げたから、車を止めたら「お願いします」って乗つたんだって。「これで最後ですよ」ということで乗せて、「どこまでですか」って聞いたら「B町の商店街までつれてつてください」って。そこでB町まで着いたら、料金払つてもらう時に、その女の人が「お金を持っていない」というふうに言つて「現

金の代りに指輪ではいけませんか」と言つたんだって。でも、運転手さんとしては現金の方がいいから「指輪じゃ困る。なるべく現金がいい」って言つて。あとで払つてもらおうと思つて、電話番号と名前を聞いて帰ろうとしたんだけど、よく考えてみたら、女人の人の指輪の宝石がすごいきれいで、そのタクシーの運転手さんが宝石が欲しくなつて。後ろから石を投げたら、女のひとの頭に当たつて気を失つたんだって。その間に指輪を取りうとしたけど、指輪がなかなか取れなくて、取れなくなつちゃつて。それで、手を切つて指輪を自分の物にしたんだって。その死体は草原に埋めて、そういうふうにして。

その事件は警察も気がつかなくて、犯人は見つからぬまま十年の月日が流れ。で、ある日、同じ日の同じ時刻に、同じ場所に、こんどは小さい子が立つていて、「お願いします」って言うんだつて。ほんと「じゃ、最後ですよ」って。その時もそう言って道を聞いたら、やつぱり「B町の商店街までお願いします」って。「はい」って言つてそこまで乗せてつて。その途中の車の中で、運転手さんが、その子どもに「お父さんはいるの」と聞いたら「いない。小さい頃に死んじやつた」って言つた。で、「お母さんはいるの」と言つたら、「お前に殺されたんだ」って言つたんだつて。

(大川綾子)

彼女はこの話を中学一年の時に高校生の姉から聞いていた。学校では、放課後などに親しい友人に話して聞かせたらしく、私が教室で本話を紹介したところ、彼女から聴いたことがあるという反応を示した生徒が数名いた。

彼女の話しぶりは全体に淡々とした調子で、どちらかというと感情を抑えきみに筋を運ぶが、最後の場面で、突然「お前に殺されたんだ」と大声で叫ぶ。瞬間、聴き手はギクッとした表情を見せ、ため息とも驚きともつかぬ声がもれる。その時、あたかも、自らの犯罪を暴露されたような不安と恐怖がはしるらしい。多分、その理由のひとつは、物語りのなかにおける聴き手の視線と心情が、殺人を犯した運転手の行動と重なり合いながら進行していくためであろう。話の後半で、過去に殺人を犯した時の情況が二重写しのように描き出されるにつれて、漠然とした不安と一種の戦きのような感情が聴き手の側に生じ、最後の思いがけない一言で、それが一举に増幅されれる。なかなか巧みな仕掛けが用意されていて、子どもたちには、最後の驚きを演出する面白さがうけているようだ。

ここでは、都市の子どもたちが日常的に接する生活場面が話の世界として描かれている。随處に現代社会を投影した舞台設定がほどこされていて、その意味では、実際にどこかで起つたとしても不思議でないような現実味が、話にある種のリアリティを漂わせている。

類話は、今のところ手許に五例ほど確認しているにすぎないが、資料の乏しさはこの分野の調査が手薄なためで、今後報告数の増加は期待できそうだ。

ところで、「奪つた指輪」にみられるような現代の物語りには、それらを話す子どもたちのどのようなメッセージが隠されているのだろうか。創造し、話し伝え、共鳴していく過程で形成される彼らの口承の世界を読み解くには、子どもたちを取りまく社会的背景や人間関係の内部に想いを馳せねばならない。と同時に、多様な意味

を内在し、状況に則して柔軟に語りの表情を変えながらも、それが、ある一定の類型的な口承の枠組に依拠して機能している面も見逃せない。「奪つた指輪」を話型として捉えたばあい、どういった話の系譜に位置づけられるのか、いくつかの資料をもとに検討してみよう。

#### 〔資料二〕 旅の薬屋

昔あつたである。あるところに、旅の薬屋、ある村い、薬売りに行つっていたところが、日が暮れてしまつて、「はてへ、今日は薬も売れてしまつたし、またどうしても家さ帰らねばなんねえな。金も置いて来ねばなんねえし」。そう思つて、舟場い来たところが、船頭さん家さ帰るところであつたでな。  
「ああ、船頭さんへ、悪りども、どうか船越してくんなかいや。」「おれ、もうはや、家さあがつて行がねばなんねあんだ。夕飯だがな。」「いや、そんなこと言わねで、一つ頼むわね。おれ、今日どうしても金置いて来ねばなんねがな。」「そうがね。それは困つたな。しかたねえから、そうせば越してやるで。」「ああ、よかつたへ。そうせば頼むわね。」「それから船頭さん船出したところが、その父ちや考いたでな。「おれは貧乏で金持たねえから、そうせば、この薬屋殺して金盗るか。そうして、川い投げれば誰もわからんねから。」父ちやそう思つてこんだ竿で力いっぱい殴つたところが、薬屋死んだから、財布盗

つて川い落して、ぐんぐんと家さ帰つて来て、

「婦さへ、今日は薬屋ば残して、金盗つて來たわい。」

「お前また、どうして金盗つて來たば。」

「おれ、薬屋ば竿で叩いて、川い落して來たわい。」

「それ、わからんねえがな。」

「それ、誰もわからんねえわい。」

「そうせばいいども。」

そうして、その財布出して中見たところが、錢いっぽい入つてい

たでな。父ちや、

「あれ買つて來い。これも買つて來い。」

と言つて、大変な騒ぎだでな。ちょうど薬屋ば殺した晩、月夜であ

つたでな。またその明日船越しに行つて、夕方暗くなつて帰つて來

たところが、道端で三つぐらいの子供いがあつたでな。

「ただ置かんねえわい。氣の毒で、おれもそうせば子供いねから、

拾つて行つて育てるか。」

そう思つて、父ちやその子供拾つて来て、

「婦へ、今日は子供道端でいたから、おれ、氣の毒だから拾つて來たわい。」

「おら家で、子供いねから、ちようどよかつたな。」

そうして「一人が喜んでいたでな。ところが、その子供、三日もいたども、一つも口聞かねえでなあ。一人が、「はてな。具合い悪いいだべかな。」と思つてていたところが、その晩寝ていたところ

が、口聞いて話し出したでな。

「しつこ出る、へ。」

と、父ちやに言つたから、父ちやも大変喜んで、

「娘（）、しゃべつたがな、しつこ出るて。」「あ、そうげ（）、そ  
れよかつたな」

そうして、二人がその子供つれて行つて、しつこ出していたところが、その子供しゃべつたでな。ちょうどまた月夜の晚であつたでな。その子供お月さま眺めて、

「今晚はいい月夜の晩だ。おれ殺された晩と同じだわい。」

そう言つたところが、父ちやと娘さ青くなつて、家さ逃げこんでしまつたでな。それからこの家は、悪い事ばっかり続いて、碌な事ねかつたという話だ。昔さがつた。

大東文化大学民俗学研究会編『新潟の昔話<sup>(3)</sup>』に拠つた。東蒲原郡津川町の清野一太氏の語りである。いわゆる異人殺し伝承と呼ばれる話群に属す話で、「こんな晩」という話名でよく知られている。先の「奪つた指輪」とちがつて、このほうは伝統的な民俗社会を舞台

結果状況	輸送手段	旅の薬屋	奪つた指輪
被害者	船渡し	タクシー	女性の乗客
目的物	薬所持金	運転手	小さな子

同じ月夜の晩 同日同時刻 殺害の暴露 殺害の暴露

表 1

に語られていて、登場人物や個々の道具立一つをとっても違ひは明瞭である。しかし、双方の構成要素の配列と機能を比較してみると(表1)、まったく異種のイメージをもつ両話が、実は形態上は同じ構造を有していると判断できる。「渡し船」を「タクシー」に、「船頭」を「運転手」に、「金」を「指輪」にと置き換えていくだけで話の印象は一変するが、モチーフとその並びからみて同じタイプと認めてよいであろう。

各要素間の機能にも対応関係が認められる。船は渡し場と対岸を結ぶ交通手段だが、目的地に着くまでは川という境界領域を横切らねばならない。船の一歩外は危険な水域であり、そこでの主導権は当然船頭がにぎつている。貧しい船頭と金を持する旅人、見ず知らずの者同士という組合せは不安に満ちた緊張を生み出す。一方、タクシーの場合も、たえず境界をすりぬけ、未知の空間を横切りながら乗客を目的地に運ぶという点で共通する。深夜の街を移動する狭い車内には、高価な指輪をはめた女性と運転手しかいない。殺人事件発生の現場として、二つの話には共通の空間と心理的状況がセットされている。ただし、現実の社会では、タクシーの運転手が乗客に殺される事件はまれに発生しても、その逆のケースは聞かない。にもかかわらず、運転手を怖い犯人にイメージする背景には、女子中学生くらいの年齢層がいだく不安と結びついているのかもしれない。つまり、深夜、女性がひとりでタクシーに乗るとどこかに連れ去られるのではないだろうか、という心理が働いているよう思う。また、強奪の目的物が指輪であるのも、宝石のもつ高い価値と地位、それに女性のあこがれを象徴しているようで面白い。

### 三、近世異人殺し伝承の諸相

まったく異なる印象を放つ二つの「こんな晩」型の話を取りあげて比較を試みたが、ここで少し注意を要するのは「こんな晩」と言つた場合、一般的には大凡つぎのような内容の話を指していうことが多い、という点である。

〔要約二〕ある家で旅の六部（座頭）を泊める。家の主は六部の所持金に目をつけ密かに殺害する。奪った金で家は豊かになり、やがて一人の子供が生まれるが口がきけない。ところが、ある晩「しつこ」と言う。初めてしゃべったというので外に連れ出して小便をさせていると、子供が突然ふり向いて「お前が俺を殺したのもこんな晩だつたなあ」と言う。

る大金を狙われて、水の中に突き落とされる。こうした筋書きは何もここでの新趣向ではなく、これもひとつ語り口のようであつた」と述べている。類型性をえた話として分布している実態を見通した発言で、野村氏の指摘は遡つて近世の資料からも裏づけることが可能である。寛延三（一七五〇）年刊の『怪談登志男』巻第二には、「水上殺害」のモチーフをもつ座頭殺しが載っている。

〔要約二〕芸州嚴島のあたり、大阪町という所に田澤屋という廻船問屋があつた。永禄年中のこと、一人の座頭が官金数百両を身につけて田澤屋の船に乗りこんだ。ところが、海上一里も出たかと思う頃、突然、座頭が「金が無くなつた」と騒ぎはじめ、船内が騒然となる。死に物狂いで捜し回る座頭を、船頭がとどめようとするうち、誤つて二人とも海に落ちる。そんな事件があつて後、ある日、田澤屋の主人のもとに座頭の亡靈があらわれて、船頭に官金を盗られた上に命までも奪われたと怨みをのべる。実は、船頭は座頭をとどめると見せかけて海に突き落とし、自らも海中に飛び込んだのだった。うまく逃げ出した船頭は、その金を田澤屋の若旦那と山分けしていた。しかし、悪事が露見したあと、船頭たちは目がつぶれて狂い死ぬ。田澤屋は没落して荒れ果て、化物屋敷と呼ばれたという。

先に掲げた資料二との顯著な相違点は、六部を殺す場所のちがい、つまり水上での殺害ではなく、六部を泊めた宿の主が秘かに殺して金品を強奪する屋内での殺害となつてゐる部分である。現在までに報告された資料では、この「屋内殺害」のモチーフが圧倒的に多い。ほとんどの被害者は家中で殺害されるが、しかし「水上殺害」のモチーフが例外的ケースだという訳ではない。数こそ少ないが類話は資料二の他に、岡山県真庭郡川上村<sup>4</sup>、新潟県三島郡越路町、同佐渡郡相川町から報告されている。この点に関して野村純一氏は「世間話とこんな晩」の中で「旅の途中で川を渡ろうとする者が所持す

大船を扱う廻船問屋の没落にまつわる世間話である。異人殺し伝承は、しばしば特定の家の盛衰、とりわけ凋落の原因を説明する機能を帶びているが、これもその一例であろう。殺害の場所が海上の上、ストーリーもやや複雑だが基本的には同じ系列の話と考えてよ

い。

つぎにもう一例、宝暦十二（一七六二）年四月に芸州広島の町中で、廻國中の六部が語った懺悔話に耳を傾けてみたい。

〔資料三〕 江戸の者の由、六十六部番町を通り京橋町友屋の所にて懺悔話致し候、今より以前の事とぞ、この者包躰大井川の川越たき者なり、早く渡しひれ候やうにと申す、川も水増し居り候へども金子余程所持致し、全く盜み取り遁れ候者と相見へ候ゆへ、成程と受合ひ中ノ瀬迄渡り、ここがよき金取り場と存じ、増銀ねだり取り、また先の瀬にても金二歩取る、金は望み次第遣はし申すべく間、早々渡してくれ候やうに申す、跡より追手もかかり候ものと申し候に付き、悪心起り深みにて直ぐになげ、下へ流し命を取り、金子を奪ひ直ちに江戸へ立ち退き候て、店を借り当分暮し、その後小家を

求め妻を呼び三年以前男子出生致し候へども、一向声出申さず、泣き候事も無く、この夫婦これのみ歎き候ところ、或る時その子に向ひ、いかが致し候故もの云はぬやと申し候へば、その子ふと一聲發し、大井川の事忘れ給ふな、と初めて申し候に付き、甚だ以つて気に出たへ、さては右の因果にて候と存じ、妻に暇を遣はし、この子を存分大切に育てくれと申し、私は思ふ子細あれば廻國に出づるなり、万一命ながらへたれば帰りてまたも逢ふべしと、金子相渡し罷り出で、これより九州廻り候と出し申し候。（傍線、稿者）

「こんな晩」の話名は、おそらく、最後に子どもが発する「俺を

殺したのもこんな晩だつたなあ」という不気味な一言からの命名であろう。この言葉がいつの頃からあつたものか、判断の手掛りを持ち合せていないが、右の資料には「その子ふと一声發し、大井川の事忘れ給ふな」と、決定的なせりふを吐く場面が描かれていて興味深い。嘔の子が、ある日突然口をきいて、父の秘密を暴露するという筋立がすでに成立していたことがわかる。川越人足が肩にかついだ男の金を目当てに殺す内容は、すでに述べてきた「水上殺害」のモチーフと軌を一にしている。さらに示唆深いのは、この話を語つた人物が事件の当事者であるということだろう。つまり、自らの体験談の中に異人殺しを取り込み、懺悔話として語つてゐるわけで、ここには、この種の異人殺し譚を携えて、諸国を巡り歩いた六部自身の姿が彷彿として浮かび上がつてくる。因果応報を説きつつも、その実、話の裏側には、漂泊の旅に明け暮れる危うい身の上に対する自己防衛の意図がにじみでてゐる。

今日、子どもたちが好んで話題にする「奪つた指輪」は、以上みてきたような話の広がりの中で把握しておくことが肝要だろう。「奪つた指輪」が新潟の「旅の薬屋」を直接の素材として創られたのかどうかという問題は別にして、少なくとも、水上殺害のモチーフをもつ異人殺し伝承の構造に依拠しつつ、現代のはなしとして創造されたのではないか、との予想は成り立つと思われる。

さて、ここで、先に一般的であると言つた、座頭を屋内で殺害するモチーフの話について触れておきたい。この型の話は、日本海側に沿つて濃密な分布を示しながら、北は東北地方から西は中国・四

文献の上からは、享保十一（一七二六）年刊の『諸仏感見好書』<sup>(10)</sup>に次のように出ている。

〔資料四〕 座頭ヲ殺シテ子ト生ル

勢州ニ凶男有り。座頭宿ス。凶男官金ヲ持スルヲ見テ、夜ル殺シ金ヲ取り衣ヲ剥グ。俄ニ家へ富ム。妻男ヲ生ス、取り上ケ之ヲ見バ盲目也。然モ好ク殺セシ座頭に似リ。愛憐シテ成長ス。五歳ヨリ十四歳マテニ悉ク父カ財ヲ費シテ云ク、吾ハ父カ殺セシ座頭ナリ、吾力官金遣ヒ尽スト雖ドモ未タ命ヲ取ラズ。父聞キ怖シテ口ヲ開カズ。盲人或夜父ヲ殺シテ恨ミヲ報シ、又々吾レモ自害ス。誠に因果ハ遁レ難キ者也。

最後の「因果ハ遁レ難キ者也」と、念を押すような一言に、まさに因果応報の思想が色濃く打ち出されている。文そのものは短いが、今日の「こんな晩」と基本的に変わることはない。旅の宗教者を対象とする異人殺しは、近世には広く人口に膾炙していて、それがの状況に応じた多様な語られ方をしていたと考えて間違いないだろう。因みに、数多くの奇談を収録していることで知られる『新著聞集』（寛延二年）にも「殺害の憎子となつて家をほろぼす」という話が記録されている。

〔要約三〕 江戸に住む岩間勘左衛門という侍が、息子の博奕狂いから一家崩壊の責任をとつて切服を命ぜられた。いざ切服という時、檢使にむかって過去に犯した過ちを話し始める。それによれば、若

い頃部屋に泊めた聖を殺して金子三百両を奪い取ったという。その後、何不足なく生活し妻を迎えるが、やがて、八十郎が生まれたが、この子は殺した聖にそつくりであつた。八十郎は成長ののち博奕におぼれ、一家を破滅に導いただけでなく、ついに親を切腹にまで追いつめたのである。

博奕狂いの息子は座頭の生まれ変わりであり、父親は一家離散・切腹という形で過去の報いを受ける。父子の名前まで明らかにされていて、いかにも事実を書き留めたかのような記述である。当時、博奕がもとで一家離散の末切腹という出来事が実際にあつたかどうかは別として、話の顛末は異人殺し譚の域を出るものではない。

このように見てくると、現代を象徴する「奪つた指輪」も、話型としては目新しいものではなく、先行する口承文芸の骨格をむしろ忠実に受け継いでいるといつてよいだろう。

#### 四、現代の異人殺し

異人殺しに関する事例をいくつか紹介してきたが、ここで、それらを話型という概念で括し、その類似性を指摘するだけでは充分でない。見落してならないのは、異人殺しが新たな意味と表現をまとひながら、現代を呼吸する物語として鼓動している、そのことへの眼差しであろう。

ただ、そうは言ってみても、私には少々手にあまる課題なのだが、ひとつのかつかけとして、因果応報の思想を手掛りにその変容の一

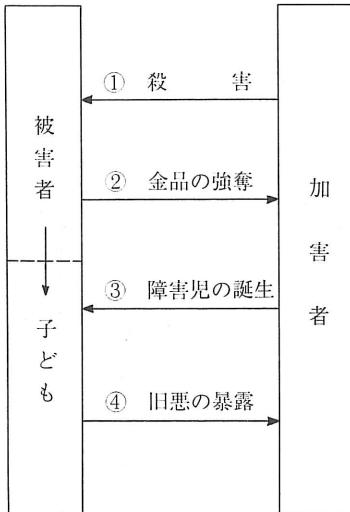


図 B

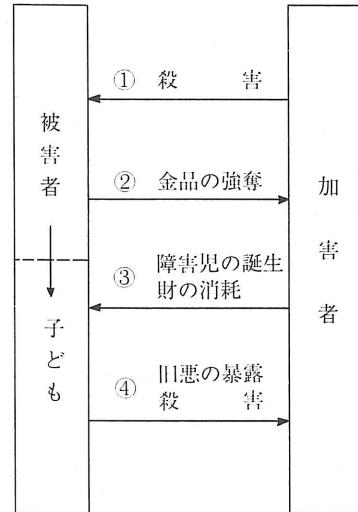


図 A

端を探つてみたい。

まず、資料四の「座頭ヲ殺シテ子ト生ル」を取り上げてみる。話の展開に従つて、加害者（凶男）と被害者（座頭）の関係を図式化すれば図Aのように表わすことができよう。

①凶男が座頭を殺す。

②座頭の金・衣を奪いとり、家が富む。

③座頭によく似た盲目の子が生まれ、家の財を消費する。

④ある時、子どもが父の旧悪を暴露し、殺害する。

他の事例と照らし合せてもう少しくわしく解説すると、加害者と被害者の関係では、欲に目が眩んだ男と旅の宗教者という組合せが一般的だが、必ずしも定つてはいない。殺害の方法も事情に応じて変化するが、殺すという行為はいずれにも共通しており、その目的が金品の強奪にある点も一致する。盗った金で豊かな生活を手に入れたのち、ひとりの障害児が生まれるが、この子は明らかに殺された座頭の生まれ変わりである。資料四では自ら「父ガ殺セシ座頭ナリ」とはつきり名乗っているが、話によつては「殺した人物によく似た子」という表現で、その因果関係を暗示するケースも多い。とくに盲目の子であったと語るのは、すでにその時点での過去の犯罪を想起させる薄気味悪さを帶びている。生まれた子がきまつて障害を負つているのは、もとは、その障害がもたらす経済的損失が、父親の財の減少をまねく原因として機能していた点は押えておきたい。たとえば『善惡報ばなし』<sup>(1)</sup>（元禄年間）の「前世にて、人の物をかり取り、返さざる報により、子と生れ来て取りて返る事」は「こんな晩」とよく以た因果応報譚で、百姓家に生まれた足の不自由な子

が、のちに前世の報を果す話である。親は「さまざま医薬をつくし、或は藁ぐひなどさせ」治療するが一向によくならない。ところがある時、米と錢をつかんで立ちあがり「我を子と思ふて、今まで育てつるこそ愚か也。汝に前世にて錢米を貸しけるが、終に済まさず。是を取らんがため、我れ汝が子となり、廿一まで汝が物を喰ひつくし……」と言い残して去る。明らかに、不自由な足は親の財を食いつぶす原因として語られている。つまり、図Aにおいて③の障害児の誕生は②の金品強奪と対応関係にあり、被害者が、奪われた富を治療費の支出という形で奪い返す手段だと判断できる。当然、④の父親殺害は①の座頭殺害と釣り合っている。いうならば「殺して金品を盗る」という手順（①→②）が、入れ替つて「金を盗つて殺す」という手順（③→④）で相殺される。加害者の犯した罰と奪つた富は、時間の経過とともに、そつくり裏返した格好で自らの子によって奪われてゆく。ここでは、因果応報のバランスが見事に保たれていると言つてよい。

では、目を転じて、今日の「こんな晩」では両者の関係はどう語られているだろうか。それを示したもののが図Bである。これで見る①②の行為はほぼ同じだが、③④に変化がみられる。まず③の場面では、障害児の誕生を説くが、ところがそれに伴つて生じる財の減少は語られない。④でも最後に旧悪を暴露するのみで、父親の殺害にまで及ぶ例は極めて少ない。また、子どもの障害の多くが「口がきけない」というのも特徴的だが、そのことは最後の思いがけない一言が引き起こす効果を高める伏線として働いている。その意味では、もっぱら秘密の暴露という点に話の興味が傾斜していて、

「座頭ヲ殺シテ子ト生ル」にくらべ因果応報のトーンがうすれていくといえよう。ただし、見方によつては、最後のぞつとするような不気味な迫力は、「財の減少」や「父の殺害」を文脈の底に沈めて、ひたすら、悲惨な末路を聴手の想像力に委ねているところから生まれてくる語りの文芸的效果と解釈することもできる。ところで、現代の「奪つた指輪」では、この障害児の要素が見当らない。代つて、深夜の路上にぼつんと正体不明の子どもが立つてゐるだけである。

さて次に、図AとBの違いをどう解釈すべきかという問題が残る。ごく大雑把にAからBへの変化、つまり因果応報の希薄化に伴つて生じた話の変容と考へたいところだが、しかし、単純にそうした道筋を想定できないのは、資料三（宝暦十二年）の六部の懺悔話が、すでにBに近い形態を示していることからも言える。一つには、資料四是因果応報の理を説く仏教説話集に收められている話という条件を考慮しなければならないと思われる。A・Bの差違は、一つの物語の先後関係を示すものではなく、この種の異人殺し譚が同時平行的に多様な語られ方をしていた、その現われかたのちがいと理解すべきであろう。

因果応報の思想をつねに基調にしつつも、話にこめられた意味と、語り出された話が呼びおこす波紋は、それが語られる状況のなかでの人間関係の複雜な思惑に彩られている。民俗社会の文脈から異人殺し伝承を読み解く作業は、小松和彦氏12らによつて精力的にすすめられ多大の成果をあげている。

以上、タクシーの怪談にまつわる「奪つた指輪」を出发点にして論をすすめてきたが、再び視線を現代に移して「こんな晩」型の異

人殺しが、若者たちの間に今どのような姿で息づいているのか、その新たな創造力の行方を示す話を紹介してみよう。

〔資料五〕 母と子

美男美女の若い夫婦がいました。本当にお似合いのカップルで、みんながうらやましがりました。その夫婦に子どもが生まれましたが、その子はとてもみにくい顔をしていたので、プライドの高い妻はその子を一步も家から出さずに、まわりの人には流産したと言つていました。

三年後、子どもを遊園地につれて行きました。遊んでいるうちに子どもが、「トイレに行きたい」と言つたので、母さんは崖のふちにつれて行き、そこでさせました。

そのとき、後ろから押して、子どもを崖に落として殺してしまいました。それから何年か後、また子どもが生まれました。それはかわいい子どもで、とてもかわいがりました。

三年後、子どもをつれて遊園地に行きました。そして、子どもが、「トイレに行きたい」と言つたので、崖につれて行き、そこでさせました。すると子どもがふりかえり、殺した子どもの顔になり、「お母さん、こんどはつき落とさないでね」と言いました。

（真下弘美）  
〔48〕

この話は、大島広志氏が「民話と文学の会・かいほう」に載せ

たもので、報告者は都内の専門学校に通う学生である。

加害者と被害者の関係が母と子というショッキングな内容となつてゐるのが目をひく。これまで登場してきた座頭・六部・薬丸りなどは、家や共同体の外から訪れる存在で、事件はそうした異人を標的にして物語られてきた。ところが、ここでは親子という世間的には一心同体とみられる肉身の絆に生じた亀裂がテーマとして語られている。母親にとって、みにくい顔の子は排除すべき存在として映つたのだろう。はからずも、異人はみにくい顔の我が子であつた。

容姿の醜陋が殺人の動機として浮上しているが、これについて大島氏が「現代人はもちろん金にも心を動かされるが、同時に、美醜にも多大な神経を使つてゐる。（中略）現代人が自らの顔や容姿の醜にたいそう鋭敏になつた証拠だ。こうした日本人の意識の変容が、「母と子」の話の中に表われているのではないかと思う」と述べてゐるのは示唆に富む。

実の子の殺害と引換えに母親が手に入れようとしたものは何か。醜い子をもつ精神的な負担からの解放か、それとも、好奇心にみちた周囲の視線からの逃避か。ここには、まるで人形に対するようなイメージで、醜い子・かわいい子を選別し、忌避と溺愛のはざまで翻弄される軽薄な愛情への痛烈な批判がこめられている。類話は、他にも、育事を投げだした母親が駅のコインロッカーに子どもを捨てる話など数多くある。

\*

\*

伝統的な村落共同体のなかで取沙汰されてきた異人は、今やその機能を失いつつあると言つてよいだらう。しかし、異人たちとはさま

ざまに相対化されながら、私たちの眼前に立ち現われる。対象を、あえて口承文化に絞らなくとも、近年社会問題化している帰国子女をめぐるいじめと排斥の問題や、校内暴力にともなって注目されるツッパリ少年の現状などは、異人論をとりまく視野の内から発言すべき課題のように思われる。

【注】

- (1) この話名は私が仮につけたものである。
- (2) 東京都東久留米市下里中学校。話してくれた大川綾子さんは当時二年生。
- (3) 大東文化大学民俗学研究会編『新潟の昔話』(桜楓社・一九八一年)
- (4) 稲田浩一・福田晃編『蒜山盆地の昔話』(三弥井書店・一九七〇年)
- (5) 水沢謙一編『瞽女のこめんなんしょ昔』(講談社・一九七六年)
- (6) 野村純一『昔話伝承の研究』(同朋舎・一九八四年)
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 進藤寿伯稿・金指正一校註『近世風聞・耳の垢』(青蛙房・一九七二年)
- (9) 現代のはなしの創造・伝播には、マスメディアの関与が大きい。ただ、この話自体がどのような経緯で誕生したにしろ、現在、子供たちの口承の世界で語りつがれているのは事実である。
- (10) 壱陽斎山『諸仏感応見好書』(享保十一年刊・原文は漢文、句読点を補い書き下し文にした)
- (11) 高田衛編・校注『江戸怪談集上』(岩波書店・一九八九年)
- (12) 小松和彦『悪霊論』(青土社・一九八九) 飯島吉晴「異人歛待・殺戮の伝説」(日本伝説大系 別巻1・みづうみ書房・一九八九) 参照。
- (13) 「民話と文学の会・かいほう48」(民話と文学の会・一九八七年)
- (14) 大島広志「母の子殺し」(『民話と文学』第20号・一九八八年)
- (15) (つねみつ・とおる／文京区立茗台中学校)